

御殿奉公に上つておられたと聞いています。・・・トミさんが旅衣の歌を作られたということは、なにも聴いておりません。」波乱に富んだ夫の死後、平トミは静かに飢肥で余生を送り、飢肥今町の安国寺跡墓地の一角に夫平与市と夫婦墓に眠っている。享年七十三。近くには安井息軒の父安井滄州・小村兼山（小村良輔）・トミを保護した川添家などの墓地がある。

七 稲津濟 天保五年（一八三四）～明治三十二年（一八九八）

1 稲津濟の略伝

安井息軒の門人、詩文にすぐれ藩校振徳堂で教授を務めた。同藩では、早くから諸国の勤王攘夷の志士たちと交流があった人物である。幕末には藩の軍制改革を推進し、維新後は飢肥藩の貢士として明治政府で活躍した人物である。小倉処平や平部嶠南の影に隠れて、知られていないが、幕末維新期の飢肥藩を語る時、避けて通れない人物の一人である。小村寿太郎とかかわりは希薄であったと思われるが、寿太郎の幼少期である幕末の飢肥藩で大きな働きをした人物であり、寿太郎の師である長倉訥（徳助）・小倉処平兄弟にも影響を与えた。新政府で貢士を勤めた後、飢肥藩に復帰して大参事を務めた。廃藩後は上京して華族会館に勤務するかたわら南洋の号で漢詩の詩作にうちこんだ。

2 江戸遊学

稲津濟は初め休平と名乗り、次いで濟、さらに志摩介（『六鄰莊日誌』では元治元年三月十七日に初見）、再び濟（『六鄰莊日誌』では明治二年七月改名とある）と改名した。この頁では煩雑さを避けるため、濟で統一する。濟は飢肥藩の弓術師範・稲津勘右衛門を父とし、弟に落合閑齋（落合閑齋墓）がいる。幼くして同藩の漢

詩人・落合雙石に教えをうけた濟は詩文に優れていた。藩校・振徳堂で主事や句読師を務めたあと、嘉永六年（一八五三）小野昇右衛門（小倉処平の妻の兄）と江戸遊学を果たし、安井息軒の三計塾や羽倉簡堂の羽倉塾に籍を置いた。遊学中の安政元年（一八五四）にはペリー率いるアメリカ艦隊が江戸湾に入港して幕府に開国をせまると、俄に攘夷論が沸騰した。当時の三計塾には三河国（愛知県）の松本謙三郎（天誅組の乱で戦死）・清川八郎（新撰組の結成に参加）・久坂玄端（長州藩・吉田松陰の門弟・禁門の変で自殺）・高橋祐助（鹿兒島藩士・後の美玉三平。生野の変で戦死）・伊地知正治（鹿兒島藩士・明治政府参事）といったそうそうたる人物が居り、羽倉塾にも長州藩の土屋松如（吉田松陰の友）や水戸藩の原任蔵（後に徳川慶喜の側近となり、暗殺された）がいて、濟も彼らに触発され密かに攘夷を起こそうと計画したほどである。

羽倉塾の塾生だった依田百川（佐倉藩士。「明治の三筆」として有名、自身の日記『学海日録』を記す）が当時の稲津濟について「振舞いは勇ましく、鋭気に満ちていて、好んで天下国家について議論をしたものである。議論に興じて気力が満ちてくると、大声で激しく叫んだ。その声は辺りの壁を震わせるほどで、時には刀を抜いて柱を撃ちつけた。人々は気が狂ったのではないかと驚いたが、本人は一向に気にかける様子はなかった（稲津濟墓碑）」と記している。その後も安政の大獄で飢肥藩に預けられた富田織部（公卿三条家の家来。三条実美に勤王思想を教育した人物）を知り国事について熱く語り合った。

3 文久年間の濟

文久元年（一八六〇）までの濟は江戸詰と国詰を繰り返して、在国中は振徳堂の教授として勤めていた。文久二年になると京都を中心に攘夷熱がたかまり、幕末への転換を告げるような事件が続発した。この年四月、飢肥藩から世情探索を命じられた稲津濟は振徳堂

で共に教授であった清二左衛門（落合雙石の弟、長州藩に好意をよせていた）と旧友の清川八郎を訪ねて熊本に向かった。八郎との再会は叶わなかったが、収集した情報から、「京都に多くの勤王攘夷論者が集まり不穏な政情である」と藩庁に報告したところ、六月には藩から「世情を把握するため、京都・大坂で情報収集を行うよう」命じられ、早速上京している。

京都に到着した稲津済は早速、三条実美・姉小路公知・大原重徳といった勤皇派公家と面会して、飢肥藩が今後どのような政治的行動をとるべきか会談をもった。この時、三条実美らから飢肥藩主・伊東祐相が上洛して朝廷に忠誠心を示すように求められ、内勅（天皇が出す非公式文書）を与えようとまで言ってきた。ところが、江戸詰めの重臣たちは時勢に疎く、幕府中心の考えで、京都の政情については漠然として意に介さない状態であった。しかも、当時の祐相は十年近く病で飢肥に帰国しておらず、容易に祐相の上洛が実現しそうになかった。もし、内勅を得ながら上洛しなければ、勅命（天皇の命令）に背くことになる。そこで内勅の下付については断り、「藩主を諭して上洛いたします」と答えるにとどめた。

江戸に下ると祐相や重臣たちを説得したが、やはり容易に祐相の上洛は実現しなかった。当時、長州藩の周布政之助や桂小五郎（木戸孝允）らが江戸にいて国事に奔走していたので、彼等と図って祐相の説得を試みた。祐相も英明な人物であったので、ひとまず嫡子である伊東祐帰（彦松）を帰国させることに同意した。これで一応の面目を施した済は、祐相に従って十一月二十五日江戸を出発した。途中、大坂で祐相と別れて京都に戻り、姉小路ら諸公卿と面会して「次回は、必ず藩主祐相を京都に連れて来る」と言明し再び江戸へ下る。文久三年七月、約束通り祐相は上洛し天皇に拝謁、勅書を得た。

当時、各藩の執政者たちは勤王（天皇）と佐幕（幕府）どちらに政策方針をとるか苦慮していた時代であったが、飢肥藩では伊東祐

相が天皇より勅書を賜ったことにより、稲津済がめざす、尊王攘夷の実現に弾みをつける結果となった。祐相に従って帰国した済は、国元にあつて数年間軍制改革に取り組んでいる。一方、藩校振徳堂の運営はうまくいかなかったようので、安井息軒は文久四年一月二日付で平部嶮南に宛てた手紙の中で、「稲津済や清二左衛門では学校取締も行き届かないだろう、今度、阿萬豊蔵が（清武から）飢肥に移り学校係りとなることは喜ばしいことだ。」と書き送っている。

4 兵制改革

黒船来航後、軍制改革は各藩の重要な政治課題となっていた。飢肥藩では元治元年（一八六四）稲津済が軍事面も総監することに、なって、新たに鉄砲を購入している。また、砲台を建設するため、砲術に詳しい高鍋藩串間代官の横尾信太郎に指導を受けている。兵員面では、その頃までに護国隊・殉国隊・神変隊・郷勇隊を編成して兵士の訓練を行った。特に殉国隊は外様席・土器席（下級藩士の階級）の者にミニール銃を持たせ二大隊を編制。郷勇隊はさらに身分の低い浮世人・町人・漁師からなり約三十組を編制し和銃またはケーベル銃を持たせという。

軍制改革が進む一方で、慶応元年（一八六五）七月には、重臣の間で稲津済を藩政面にも登用しようとする動きがあった。ところが、藩主祐相が難色を示して沙汰止みとなった。済には、飢肥藩の地味な徳目を中心とした土風に納まりきれない資質を持っていたがために、藩主や重臣たちとそりが合わなかった。そのため藩内においては、後輩である小倉処平のような人望を得られなかったのである。また、藩内には山鹿流軍学（和流）に固執する傾向もあり、洋式訓練を主張する済らとの対立が存在していた。ついに済は、慶応二年八月に軍事吟味役と練兵教頭職を辞職してしまい、翌三年二月には兵制改革派の木脇一刀太と佐土原藤吾が練兵を終えた後、兵制改革に消極的な家老の門前で笛太鼓を吹き鳴らして騒ぎ、不満を

表すという事件が起きている。

5 戊辰戦争と飢肥藩

慶応三年（一八六七）十一月二十四日に徳川慶喜が政権を朝廷に返上（大政奉還）したことが飢肥藩に伝わると、一転して稲津藩を藩会所（藩庁）詰に起用するとともに平部崎南を家老に抜擢した。それでも藩庁の時勢を見る目は緩慢であった。済は、独自に得た情報をもとに、飢肥藩も京都を守護すべく出兵するよう藩庁に進言したが聴き入れられなかった。

そうするうちに鳥羽・伏見の戦いが起こり、ついに明治元年（一八六八）一月二十九日、鹿兒島藩から「飢肥藩は勤王か、佐幕か、旗幟を示せ」と布告書をつきつけられ、ようやく朝廷への恭順を表明した。それでも飢肥藩は鹿兒島藩が新政府の中で発言力を伸ばし、佐幕派の会津藩が討伐されることを危惧し、二月一八日に済と阿萬豊蔵を長州藩に派遣して「会津藩を武力で討つのではなく、話し合いで懐柔するよう」飢肥藩独自の立場から意見を述べている。当時、長州藩内には広沢真臣のように鹿兒島藩に懐疑心を抱き、会津藩に寛大な対応をとるよう建白した人物もいたのである。

長州での役目を終えて、次の目的地である広島に到着した済に、飢肥から「稲津藩を飢肥藩の貢士としたので、京都に上れ」との連絡が届いており、昼夜兼行で上京を果たした。

この頃、新政府は立法を担当する議政官（上下二局）を設置している。上局は皇族・公卿・諸侯・藩士から任命された議定・参与が議員となり、下局（貢士対策所）は、各藩から選出された（大藩は三名・中藩は二名・小藩は一名）貢士を議員とした。済は藩内の門閥を差し置いて、政府に出仕したのである。後に済の運命を狂わせることになる雲井龍雄も米沢藩（秋田県米沢市）の貢士として出仕している。

さっそく新政府から貢士たちに徳川家の処分や国政に関する数件

の諮問があり、済は岩倉具視に天皇の東北新征に反対を表明した。当時の飢肥の藩論は、旧幕府勢力を温存することにより、従来から対立関係にあった鹿兒島藩の勢力伸張に歯止めをかけたというものであった。しかし、この考えが鹿兒島藩の警戒心をあおり、飢肥隊は戊辰戦争において後方支援にまわされた。六月二日と八月十六日の二度にわたって済が飢肥隊を前線へ投入するよう願ったが、戦功をあげる機会を与えられず、飢肥藩士にとつて屈辱的な結果に終わった。これが十年後の西南戦争で、戊辰戦争での汚名を挽回しようとする飢肥士族たちが積極的に西郷軍に身を投ずる遠因の一つになったとも言われる。

この間、政府機構もめまぐるしく改変された。五月二十八日には貢士が公務人と改められ、次いで八月二十日には公務人が公議人に改称された。当時、済と共に公議所の審議員に選ばれた依田百川によれば「稲津藩と旧交を暖め、時勢を議論しあい、よい時代であった」と回顧している。稲津らは十月に公議人として京都から東京に移り住み、十二月には山内豊信（前土佐藩主・号を容堂）が議事調局総裁となり、各藩からの公議人は帰国させられた。ただし、総代六人を投票で選び東京に残すことになり、済は多数の票をえて議事調局幹事に就任し、同月六日の公議所（神田橋旧姫路藩邸）の開設に従事した。

翌明治二年二月一日には飢肥藩参政を兼ね、引き続き済が飢肥藩と政府をつなぐ役割を果たした。さらに七月には、公議院が集議院と改称され、済は集議院議員の互選により代表幹事も兼ねた。翌月二十七日の集議院日誌で、当時の集議院議員の顔ぶれをみると、稲津済の他に森有礼（鹿兒島・後に文部大臣）・山口良亮（高知）・境栄蔵（山口）・柳川春三（紀州）・加藤弘之（但馬）・丸山作楽（島原）・津田真道（津山）・増田貢（長尾）・関思敬（大浦）・有竹裕（大垣）・中野重明（福知山）・錦織積（相馬）・初岡敬治（秋田）・毛受洪（福井）・服部清三郎（尼崎）・伊達五郎（和歌山）が勤めて